

俗樂の起原は其の説區々紛々として參考すべき書籍も乏しく、又確實なる記録もなし、會々鸚鵡石の如きものあるも之れ全く一見する價值を有せず、要するに此の樂は散樂より派流せしものにして散樂は雜樂の一部として漢書に見ゆる所なり

一説には神代の始め吾田今の大偶薩摩に行はれたる隼人の歌の舞より出で之れより變じて散樂を出す、俳優考に依る猿樂は田樂を出し、田樂より能及び念佛踊等を出し、變化して歌舞伎となり歌舞伎は繰つりを出し、繰つりは一變して人形芝居となり、之れ又變じて演劇となり、之れに伴うて淨瑠璃、義太夫等種々の俗樂を出す云ひ、一説には古代の語り物より淨瑠璃を出し、淨瑠璃より平家物語等を出し、之れより淨瑠璃十二段を出し、之れより變じて繰つりを出し、繰つりと淨瑠璃と一致して人形芝居を出し、又之れが一變して演劇となれり、各説多少據る所ある説にして今劇かに是れが系統を一定して俗樂正傳を求むるは實に困難なる事業と云ふべし (緒論終)

『音楽雑誌』第七十一号、明治三十年)

このほか注目すべき彼の音楽論に、明治二十四年五月、神奈川県足柄上郡私立教育会の招きに応じ「音楽と足柄上郡教育會との關係」という題で行った講演がある。東西にわたる彼の造詣深い音楽知識にもとづき、地域の伝統的芸能を再確認した講演として重要なものである。『音楽雑誌』第九号および十号(明治二十四年)にその全文が掲載されている。

瓜生繁(うりゆうしげ)(旧姓永井〔静岡県土族旧幕府〕) 石川
県土族瓜生外吉妻

履歴(要約)

文久元年(一八六一)三月二十日江戸湯島に於て生れる。
明治四年(一八七二)十一月アメリカ留學を許され、岩倉大使一行と共に渡航。

同五年(一八七二)十一月七日カナテカット州ニウヘブンにおいて普通小學へ入學、三年間のうち中學へ進み明治十一年六月修了。

同十一年(一八七八)ニウヨーク州ボキプセ府バツサ女子大學音樂専門科及び文學科に入學。

同十四年(一八八一)六月二十日同女子大學音樂専門科卒業。十月三十日帰國。

同十五年(一八八二)三月二日音樂取調掛に於て教授向を囑托し年金三百六拾円を受く。ピアノおよび唱歌の樂曲分析を担当。

彼女は音樂取調掛でウルバック・Urbach, Karl: Prize Piano School. (Translated from the 8th German Edition by Eliza M. Wiley)と云うピアノ教則本を使用した。この教則本は彼女の留學していたバツサ女子大學所屬の教師によってドイツ原本から英訳されており、彼女もこの教則本で習得したものと思われる。

同年十二月一日石川縣土族瓜生外吉と結婚。

同十七年(一八八四)九月十九日年報金四百貳拾円を交付される。

同十九年(一八八六)十月一日東京高等女學校教授向を兼嘱。

同二十年(一八八七)東京高等女學校教諭。十月二十五日奏任官四等に叙せられ翌月東京音樂學校兼勤を命ぜられる。年報六百六拾円。

同二十三年(一八九〇)四月東京音樂學校囑托講師を申し付けられる。同月女子高等師範學校教諭に任ぜられる。十一月一日叙正七位。

同二十四年(一八九一)四月十七日東京音樂學校教授兼任。
同二十五年(一八九二)七月東京音樂學校辭職。

瓜生繁は帰國以來明治二十年代にかけて盛んに演奏活動を行った。明治二十五年の春、読売新聞社は婦人和洋音樂家の人気投票を行った。その結果彼女は幸田延に次いで二位であった。『音楽雑誌』第十九号(明

治二十五年四月)には上位得点者が次のように発表された。参考までに記す。

西洋音楽家

三百〇七点 小説家幸田露伴令妹

二百八十八点 東京女子高等師範学校兼東京音楽学校教授

百〇四点 東京音楽学校教師 幸田延子

九十五点 麴町區富士見町 瓜生繁子

五十八点 高嶺秀夫夫人 長原梅園

三十二点 改進新聞社主寺家村逸雅夫人 高嶺専子

舞踏家 寺家村愛子

五十点 海軍々医總監高木兼寛夫人 高木富子

三十七点 衆議院末松謙澄夫人 末松生子

まもなく瓜生繁は家庭夫人となり、ピアノの個人教授で子弟を育てた。

晩年は瓜生海軍大将夫人として多忙な生涯を送った。昭和三年十一月三日没す。

日没す。

奥山朝恭(おくやまともやす) 東京府士族

履歴(要約)

安政五年(一八五八)八月六日生。

明治七年(一八七四)十二月七日海軍水兵本部より五等鼓手申し付けられる。同日砲兵隊附申し付けられる。

同八年(一八七五)三月十一日三番小隊附申し付けられる。六月五日四等鼓手申し付けられる。

同九年(一八七六)二月十五日三等鼓手申し付けられる。

同十年(一八七七)二月十四日東海鎮守府より三等水兵申し付けられ、軍

楽隊専務となる。

同十一年(一八七八)十二月二十七日樂手に任ぜられる。

同十五年(一八八二)五月二十日海軍省より本官を免ぜられる。

同十六年(一八八三)五月五日音楽取調掛に雇い上げ小使取締を申し付けられる。日給金貳拾貳錢。

同年十二月一日願いにより退職、同日寫字生を申し付けられる。「俗曲改良

の仕事を担当、箏曲や長唄の採譜を行った。」

同十七年(一八八四)十一月一日再び雇となり當直員を申し付けられる。

十二月四日生徒取締に転ずる。

同十八年(一八八五)七月二十七日取調掛兼庶務掛生徒掛を命ぜられる。

同十九年(一八八六)一月二十一日、三たび雇となり宿直員を申し付けられる。

この間奥山は音楽取調掛に所属している身分を活用して、音楽教員の資格を取得するための力を養っていたようである。二十年(一八八七)

七月八日、彼は音楽科の教員免許を取得した。そして一カ月後の八月二

日付で兵庫県尋常師範学校に助教諭として赴任した。したがって音楽取

調掛はこの時点で退職しているようである。明治三十九年(一九〇六)

彼は教員生活をやめ、全く一新して岡山市内に西洋料理店を開き後半生

を送った(『音楽教育成立への軌跡』昭和五十一年「一九七六」二〇一頁)。昭和

十八年四月九日没。有名な唱歌(湊川)へ青葉しげれる櫻井の(明治三十二年六月)は彼の作曲である。

宮内省式部寮雅楽課伶人

音楽取調掛における伶人たちの足跡は今日高く評価されている。田中康子氏が彼女の論文で「彼らは海軍々楽隊を先行者として西洋音楽の伝習を開始し、中心メンバーの多くが参画した音楽取調掛では逆に自らが先行者の役割を担った」と述べているように、伊澤修二を主軸とした音楽取調掛の事業は、彼らなくして成し得なかつたといつても過言ではない。雅楽部の伶人が西洋音楽を習得はじめたのは明治七年で、明治新政府の国際化に伴い宮中での西洋音楽の需要が多くなったためであった。田中氏の論文をかりると、それまでは宮中で西洋音楽の奏楽が必要となると、軍楽隊が宮中が上がっていたのだそうである。当時、国内で西洋